

解剖台顕現

国立療養所大島青松園と瀬戸内国際芸術祭 2010 と展示作品解剖台

阿部 安成

sorrow 1 2010年7月19日(海の日)に開幕した「瀬戸内国際芸術祭 2010」(以下、芸術祭、とする)は、いくつものメディアでとりあげられ、少なくとも関西ではこの夏の1つの大きなイベントとなった観がある。JR琵琶湖線車内では、安藤忠雄の顔が大写しとなった吊広告が、10月31日までの会期中にしばしばみられた。犬島、小豆島、豊島、直島、男木島、女木島、大島の7つの島々と高松港周辺などを会場としたこの芸術祭は、開幕から1か月で来場者数が18万7033人となり、その数は「見込みを上回るペースで伸びて」と報じられたのだから(2010年8月19日09:41 配信記事)、まずまずの活況とってよい出だしとなり、ついで、「開幕から49日目の今月〔9月 引用者による。以下同〕5日」に30万人を突破、さらに9月18日までの来場者数が40万人をこえたとなれば(同年9月20日09:44 配信記事)¹⁾、主催者は営業の成功を喜んでいることだろう。



¹⁾ 四国新聞社のSHIKOKU NEWS(<http://newss.shikoku-np.co.jp>)で2010年9月6日と22日に閲覧。芸術祭実行委員会は当初、「105日間の会期中の目標集客数」を30万人と掲げていたという(同年同月7日09:27 配信記事)。9月18日には1日で1万4872人が来訪し、1日最多来場者記録を更新。この日までの会場別来場者数は直島14万9958人、豊島6万5775人、女木島4万1531人、男木島3万9109人。直島では当日分整理券が午前中に配布終了、男木島では展示鑑賞に1時間から1時間半待ちとなる。



会場の1つとなった大島には、70の番号がふられた展示作品がある。展示場所は3箇所に分か

れて、それぞれに「GALLERY15」「カフェ・シヨル」「Morigami」の名がついている（芸術祭公式ホームページ <http://setouchi-artfest.jp>。2010年9月6日閲覧）。「島内では「やさしい美術プロジェクト」が《つながりの家》の作品を展開する」と、大島会場が案内されている。GALLERY15のまえには、かつて大島の療養所で使われていた、コンクリート製の解剖台が展示作品としてすえられた。大島での展示の「目玉」だという解剖台については、複数の新聞で報道され、記事の主調は、「悲しみ」となった。

解剖台から悲しい歴史と記憶を引き出した報道については、べつの稿に記した²⁾。ここ

²⁾ 解剖台の展示報道と写真を史料として紹介する論稿を執筆し、学会誌に投稿した（2010

では、芸術祭のなかで大島がどのようにとりあげられているのかの追加情報を記録することとした。

sorrow 2 目についたかぎりの雑誌では、『カーサ プルータス』(マガジンハウス、2010年9月号)と『芸術新潮』(新潮社、2010年9月号)が、芸術祭をとりあげた。これは芸術祭ホームページでも紹介されているところで、前者は「瀬戸内国際芸術祭 2010 / 完全ガイド。」を載せ(これについては別稿でみた)、後者は「瀬戸内海 / 小さな島の大きな宝」の特集を組んだ。『芸術新潮』の表紙には、はっきりと大島が写っている。だが、そのキャプションは「高松港にて」とあるだけだった。『芸術新潮』の特集は、その第5章を「アートを探して / 島めぐり / 瀬戸内国際芸術祭 2010」と題して、直島、女木島、男木島、小豆島、豊島、犬島を訪ねての記事を載せたが、大島にはふれ



ていない。同誌の「瀬戸内国際芸術祭 2010」/ 全作品早わかり地図」も6つの島をとりあげるが、大島は個別の地図はなく全体図のなかにあるだけで、70とふられた番号と、その名称「やさしい美術プロジェクト / 《つながりの家》」とが記されているにすぎない。雑誌メディアのなかの芸術祭では、大島にはごくわずかのスペースが与えられるだけか、まったくとりあげられないかのどちらかだ。わたしの議論では、島尾敏雄、そして鹿野政直のひそみにならって、大島は入っているか、との構えをとるとしよう³⁾。

なお、芸術祭主催者は、公式ガイドブックを発行している⁴⁾。

sorrow 3 テレビ番組では、NHKが総合テレビの番組「ぐるっと関西 おひるまえ」(2010

年8月31日投函。2か月以内に審査結果の通知がある予定)

³⁾ 鹿野政直『「鳥島」は入っているか』(岩波書店、1988年)を参照。

⁴⁾ 永峰美佳ほか編『瀬戸内国際芸術祭 2010 公式ガイドブック アートをめぐる旅・完全ガイド』(美術出版社、2010年。町田市立自由民権資料館学芸員の石居人也から教示を得た)。

年9月4日放送)に、「島から発信するアート/瀬戸内国際芸術祭2010」のコーナーが設けられ、「現代アートの祭典/瀬戸内国際芸術祭/瀬戸内海の島々」が紹介された。番組には芸術祭の総合ディレクター北川フラムが出て、各会場のアートを説明していた⁵⁾。そのうちの1つ、大島についてはつぎのとおり。

〔大島の北から南を眺めるスティル映像〕大島ですが、昔から国立のハンセン氏病の療養所でした、療養所だったんですね、けどいまはそういったことは、伝染病でもなんでもなくなった、で、ここにおられるひとたちのいろいろな作業をですね、〔カフェ・シヨルの外観同前〕その、焼きものをつくったり、そういったものをみせるギャラリーをつくったり、そこでとれる、えー、ものを使った〔カフェ・シヨル内観同前〕カフェをつくろうと、ということなんです、えー、もともと名古屋にいた学校の先生とか学生さんたちが、それをつなぐ作業をやりたいということで、ここはあの一、地元のひとたちと、いろいろなひとのかかわりの場をつくる、ということを目的とした、やさしい美術プロジェクトが始まったわけですが、〔解剖台同前〕で一、あの一、これは、あの一、解剖台なんです、あの一、地域のひとたちがやっぱり自分たちの歴史はこれに集約されていると、ゆーことで、これはやっぱりちゃんとみんなにみてもらおうということで、まあ非常に悲惨な歴史ですねえ、ここでいろんな手術をされて、断種されたと、そういったことをふくめたものをみていただこうと、いうふうなかたちで、地元のひとたちが出してきた展示品ですね、はい

ここでの「やさしい美術プロジェクト」による展示は、ひととひと、ひとともの、をつなぐという趣旨なのだろう⁶⁾。ではここにいう、「地元のひとたち」「地域のひとたち」とは、

⁵⁾ 北川は新聞紙上でも芸術祭案内の1つとして大島をとりあげている(『四国新聞』2010年7月6日朝刊、生活情報面の「フラムの瀬戸芸鑑賞ガイド File.6」)。

⁶⁾ 2010年8月20日に、芸術祭鑑賞パスポートは所持せず、しかし大島青松園の福祉課に滞在の届けを出したうえで在園者に会いにきていると告げて、「こえび隊」というボランティアによる大島のガイドを聞きたいと現地STUFFにお願いした。最初に対応したSTUFFは強制ではないし云々と曖昧な返答だったが、つぎのつぎに出てきたSTUFFはパスポートのないものはだめ、福祉課の許可があればよいといった。福祉課にゆくと、職員は自分たちが許可するかどうかの事案ではないという。それは当然だ、芸術祭のイベントなのだから。現地STUFFは杓子定規にパスポートの所持が条件とくりかえすのみで、芸術祭本部かどこかへ現地STUFFがかけた電話では曖昧に遠慮せよというばかりだったので、勝手に

だれか。この短いコメントでは、もはや大島に療養所はないかのようにも聞こえるが、それはちがう。大島の棧橋で官有船を降りて、1回曲がるそこを歩いて島にあがると正門があり、そこには「国立療養所／大島青松園」と記されたプレートがいまも埋め込まれている。島には、小学校があるものの、それ以外は療養所であり（いくらか私有地がいまもあるよ



うだが）居住者は「回復者」「元患者」「入所者」と呼ばれるひとたちである。園の医員、看護師、職員も宿直や泊まりのばあいもあるが、（たぶん）1家族をのぞいて島の定住者ではない。さきのコメントの文脈では、「地元」や「地域」のひ

とたちというと、療養所以外の人びと、あるいは、療養所以外のひとと療養所のひと、となるのかもしれないが、そうではない。さきのコメントをあらわしなおすと、大島青松園在園者といろいろなひととのかわりの場をつくる、大島青松園在園者が自分たちの歴史が解剖台に集約されていると感じた、大島青松園在園者が解剖台を展示作品として出した（もちろん大島の展示ディレクターと協同で）、となる。「地元」「地域」といっても、島を一步も出ていないはずだ。

sorrow 4 芸術祭の総合ディレクターの発言は、決して小さくはない大きな意味を持っている。「昔から」とはいつからか？、ハンセン病そのものは依然としていまでもひとからひとに伝染る病ではないか？⁷⁾、「解剖」をおこなう台のうえで手術をしたのか？、「だんし

「こえび隊」についていって、パスポートを所持する鑑賞者の邪魔にならないようにガイドを聞いた。「こえび隊」の方が柔軟だった。聞くと、解剖台について、療養所の歴史について基本をきちんと伝えるガイドだった。その後、霊交会教会堂図書室で仕事をするのでガイドから離れ、そのさい教会堂のなかを案内すると伝えた。霊交会代表は自由に入っにかまわないとしたい意向だった。のちに2グループが教会にきたので、霊交会のこと、教会堂のことを説明した。この日よりまえにやはり教会堂で仕事をしていたら、クリスチャンなのでお祈りをさせていただきたいという鑑賞者が教会にきたので、礼拝堂へ案内した。こうした新たなつながりもうまれるのだが、現地STUFFの対応はガイドを聞くにはパスポートが必要、つまり鑑賞料金を払えの一点張りだった。STUFFの対応は「つなぐ」という展示の理念に真っ向から反しているとわたしはおもう。なお大島に渡るにはほぼ官有船に乗るほかに、パスポート所持者も不所持者も無料でそれに乗ることとなる。

⁷⁾病がうつる、というときのこの動詞の漢字表記はどうなるか。移る、か？いまでは癩も

ゆ」と音で聞いただけでどれだけのひとがそれがなにかわかるか？　ほんのわずか75秒ほどのコメントなのだから、話し手によってもNHKとしても、きちんとした真剣の吟味をしなかったのかもしれない。ここにあげたとおり、いくつもの疑問がわいてくる。こうした疑問を引き出してしまう芸術祭総合ディレクターの発言には、曖昧な、不十分な、不正確な、そして、まちがった箇所があった。

「非常に悲惨な歴史」があった、とここでも、悲しくいたましい、と大島の歴史があらわされている。このように形容されること自体が誤りだとは、わたしはいわない。この点については、またあとで述べよう。ただし、どれほど悲惨な歴史があったによせ、大島で生体解剖があったとは、わたしはまだ聞いたり読んだりしてはいない。解剖台に乗せるのは遺体であって、それを手術することはないはずだし、生者を解剖台で手術するなどという非人間性は、いくら療養所のなかでもなかったのではないか。

NHKなり芸術祭総合ディレクターにこの点を質したらどう応答するだろうか。「ここで」とは、大島の療養所で、ということだ、というかもしれない。さきのコメントを、そう理解することもできるだろう。だが、もういちど、まえに掲げた北川のコメントの展開をみて、それが語られているバックに、展示作品となった解剖台のスティル映像があったと想像してみると、「ここで」を解剖台で、と聞いたものもいたはずだとおもう。こうした曖昧さは正さなくてはならない。そう指摘したうえで、芸術祭会場の大島を紹介するさいに、作品として展示してある解剖台に映像つきでふれたことは、大きな意義のある機会となったとおもう。

sorrow5　もう1つNHKの番組をとりあげよう。すでにまえの週に予告をみていたので、

ハンセン病も伝染病ではなく、かならずといってよいほど感染症といいかえられている。大島青松園に勤務したことのある和泉真蔵は「ハンセン病は、らい菌の感染を受けた個体の一部が、長年月にわたる共生状態の後に菌が増殖して発症する慢性抗酸菌感染症」で、「多くの疫学的事実は患者以外の感染源を想定しないと説明できないので、患者以外の感染源についての研究が続けられている」と説明する（『医者 of 僕にハンセン病が教えてくれたこと』シービーアール、2005年）。「患者以外の感染源」がある可能性が指摘されているが、感染源として「患者」があることは否定されていない。なお『広辞苑』（第6版）で「感染」は「病原体が体内に侵入すること。また、病気がうつること」と記されている。

2010 年 9 月 5 日放送のNHK教育テレビ「日曜美術館」は、わたしのこころまちになっていた。姜尚中は、大島の療養所の歴史をどう表現するか、解剖台をまえにしてなにを述べるか、と。この日のテーマは、「島とアートを巡る冒険～瀬戸内国際芸術祭 2010～」出演は、レギュラーの姜尚中と中条誠子に、「現代アートに強い関心を寄せる宮本亜門」(ナレーション)がくわわった。ただし、大島へ渡ったのは、そのうち中条ひとりだった。大島は、豊島、小豆島、直島、犬島につぐ5番めの登場で、映像は8分30秒ほど流れた(日曜美術館は美術館ガイドの「アートシーン」をのぞくと本編45分)。まず、中条のナレーションが入る。最初は、大島上空からの鳥瞰映像 屋島と大島の配置が美しく、島から出た官有船の航跡が、長く白く海に引かれてゆくのがみえる。中条アナウンサーのナレーションを記そう⁸⁾。

ハンセン病の療養施設がある大島です。施設にはいまも、およそ100人の入所者が暮らしています。明治42年に建てられた大島青松園。入所者は長年、この施設で島の外と隔絶された暮らしをおくってきました。

この島で作品を制作している方を訪ねました。高橋伸行さんは、医療施設をアートでやさしい空間にしようと活動しています。3年まえ大島にやってきました。まず案内していただいたのは、意外な展示のまえでした。

ついで、展示作品解剖台のまえで、高橋と中条の会話となる(字幕スーパーで「名古屋造形大学准教授/高橋伸行さん」と紹介がある。中条の発言に下線を引いた)。

えー、今年の7月なんですけれども、以前使われていた、とされる、解剖台がですね、えー、海岸に打ち捨てられていたということがわかりまして、解剖台というのは、つまり、入所者の方が亡くなったら、そのご遺体を解剖していたんですか、はい、そういうことになります、まあいってみれば、入所者のみなさんが、ま、人間としての尊厳というか、人間の扱いをされてこなかった、えー場所の1つ、になるとおもうんですね、セ

⁸⁾ 歴史研究者にはその職分の1つに更訂作業があることとなっている。細かなことかもしれないが、大島の療養所が「大島青松園」の名称となったときは1942年。現在もはや開設時の建造物は残っていない。したがって「明治42年に建てられた大島青松園」は不正確なナレーションである。

メント、ですか、そうですね、コンクリートできていて、あの一、当時は、当時はここはこう表面になって、ぴかぴかに磨かれていた、そうです、で、まんなかに排水口があるんですが、まあここから、あの、廃液やいろんなものがしたに落ちるように、こうなっているんですね、あの一、わたし自身がここにまず持ってきたっていう、まあ入所者のみなさんと相談しながらここに持ってきたこと、でーこれはあの一、とても大きな意味があって、ひとによっては、あの一、あまりにも生々しくて戸惑う方もみえるとおもうんですが、わたしとしては、それぞれこ一、考えていただきたい、感じていただく、あるいは、この島でずっと生き抜いてきた人びとのことをおもっていただく、それが重要じゃないかとおもっています。

つづいて、GALLERY15の展示作品の説明となり、第2期の展示となる「鏡mirror展」が紹介された。このギャラリーでは、島の療養所で使われていた品々が、1つひとつのその一部分が磨きあげられたうえで、展示されている。島の日常の品々（このギャラリー自体もかつて使われていた寮だ）の磨かれた一部分に、それをみる鑑賞者が映るというアートになっている。展示作品の1点に、囲碁の台とスプーンがあった。この組みあわせには道理がある。療養所には手の不自由なひとがいる。指が利かないから、スプーンで碁石をすくって、それを盤におく。そうした療養所の日常をあらわす展示となっている。これについての高橋のコメントが音声で流れ、字幕でも画面に示された「みなさんたくましいですよ、生き抜いていく力が伝わってくる」⁹⁾。

sorrow⁶ おそらく大島では1回（もしくは2回の可能性もある）の撮影ですべての映像を撮り終えたのだろう。映像には「7月」との表示があり、解剖台のうえには屋根があったから、7月14日以降の撮影となるはずだ¹⁰⁾。すでに、『四国新聞』（2010年7月10日朝刊）が解剖台第1報を発信したのちのこととみてよい。こののち新聞各紙は、解剖台を「悲

⁹⁾ 生き抜く、は高橋にとって重要な語となっているようで、くりかえし用いられている（高橋伸行「つながりの家」『青松』通巻第654号第67巻第5号、2010年10月）

¹⁰⁾ 7月13日に在園者が撮影した写真には野ざらしの解剖台が写っている。また、「鏡mirror展」の会期は8月の12日から31日までだから撮影は2回おこなわれたのか。

しみ」一辺倒で報じてゆく。NHKの「日曜美術館」放送は、それからおよそ2か月後となるわけだが、その撮影は新聞各紙が大島の解剖台を報道した時期とおおむね重なっているだろう。解剖台引き揚げを報せる記事には、「悲しみ」とともに「生きてきた証し」の語もみえた。高橋による「生き抜いてきた人びと」の語を用いた告知は、「生きてきた証し」の語よりももう少し強く、解剖台がただ悲しみに充ちた死をあらわすにとどまらず、療養所での人びとの力強い生をも感じさせるとの主張になっていた。

人間の尊厳が踏みにじられ、ひととしての扱いをうけてこなかった過去をあらわす遺物としてこの解剖台を観覧するとき、さきにみた北川の「非常に悲惨な歴史」という発言につづる療養所の過去の見方がそこにはあらわれている。そのうえで、療養者が生前にそのうえに乗ることはなかったはずの解剖台を、彼ら彼女たちにとっての「生きてきた証し」として観覧しようとの勧めは、どこか筋ちがいの感じがした。(GALLERY15の展示「鏡mirror展」の意図をふまえれば)療養所を生き抜いた人びとの生のたくましさを展示作品に感じたのは、あたりまえのことではあるが、ほかでもない、展示を鑑賞するものたちだったのだ(とわかる)。スプーンを使う碁打ちや、展示にはないが舌を使って点字を読む舌読をみたり聞いたりすれば、わたしたちは、療養所のなかに確かにあった、生き抜く力強さを感じるだろう。だが、あたりまえのこととして、解剖台のうえに乗せられた死者は、そこで「生きてきた証し」を確かめたはずはない。スプーンを使ってでも碁打ちをしたひとや、舌を使ってでも点字を読み、なにかを知ろうとしたひとたちは、そのたびに「生きてきた証し」を感じたのだろうか。療養所の外で暮らす非当事者による「生きてきた証し」の表現は、当事者の意思を過度に代弁しているとみえてしまう。

sorrow 7 ここで立ち止まってわが身をかえりみれば、わたしは、スプーンを使わずとも碁石をならべられるし、舌を用いずとも本を読める。だから、囲碁とスプーン、舌と点字という組みあわせの駆使には、わたしの能力とはべつな、そしてわたしにはない、わたしをこえる力強さを確かに感じる。けれども、わたしは、それを彼ら彼女たちが「生きてきた証し」とか「生き抜いた」と形容してあらわすことに躊躇がある。なぜならば、わたし

(たち)をこえる能力の発揮に「生きてきた証し」を認めたり、「生き抜いた」との賛辞を与えたりすることは、(おかしな言い方かもしれないが)わたし(たち)ていどだったり、わたし(たち)以下だったりする能力は、賛辞や称賛の対象外となってしまう気がするからだ。療養所のなかに目を転じてみれば、囲碁もしない、点字も読まない、ただ日々を過ごしたもののたちにとっての「生きてきた証し」はどこにみつけれられるのか、あるいは、ためらいつつも記すと、生き抜けなかったひとたちは、初めからその賞賛授与の選考外となってしまうのか¹¹⁾。人間扱いされない苛酷な悲惨な境遇や環境においてなお、力強く生き抜いた生を、わたしたちが療養所の歴史にみつける。1つみつければ、もっと多くのさまざまに力強く生き抜いた生を見つけようとする。この探査が、療養所で力強く生き抜くことを当為とする指示に転化するとしたら、それがもつ意味はほとんど拷問にちかくなってしまっているのではないだろうか。

こうしたわたしの異議申し立てに対して、そうではない、酷く厳しい生を生き抜いた、そのことを素直に率直に讃えたい、注目したいのだといわれてしまうかもしれない。では、生き抜いたその最期の場所が、この解剖台だったとき、そのことと、人間扱いされなかった、という思いとは、どうつながるのだろうか。隔離した強制隔離の島にある療養所でも、療養者たちは力強く生き抜いてきた、(これは確かにそうだ)、しかし、その生の最期を、その尊厳を無視して粗末に扱ったその証が解剖台なのだ、ということなのか。力強く生き抜いてきたにもかかわらず、その最期の場が解剖台のうえだったことが、療養所の歴史の「悲しみ」をあらわし、療養者の記憶に「悲しみ」を刻んだ、となるのだろうか。ひとまず筋がとおっているように見えるこうした理解の仕方をまえにしても、依然として、わたしには、解剖台と「悲しみ」、そして、療養所において「生き抜いてきた」生をつなぐこ

11) 「生き抜く」「生き抜いた証」の言葉はほかの場所でも使われるハンセン病問題にかかわる頻出語である。たとえば、国立ハンセン病資料館の常設展示テーマの1つが「生き抜いた証」であり、同館2009年度秋季企画展「ちぎられた心を抱いて - 隔離の中で生きた子どもたち」でも「生き抜くことの力強さ」を感じることを展示の主張としてあげている。そしてこうした主題をおくことは療養所に生きたものたちの意思でもあった(阿部安成「「底」をみつめる - 国立ハンセン病資料館企画展「ちぎられた心を抱いて」展によせて、大島療養所の逐次刊行物『藻汐草』から子どもの作品を転載する」滋賀大学経済学部Working Paper Series No.114、2009年8月、を参照)。

とが、既報の新聞記事やこれまでみたとおりのコメントでは、うまく納得できなかったのである。

sorrow 8 わたしがいただいた違和感にかかわってもう1つ疑義をあげると、「悲しみ」とは、だれの感情として示されているのだろうか。たとえば、いまも大島に暮らすひとから解剖台にかかわって、死んでからあんなところに寝かされるのは酷いことだ、といった話を聞いたことがある。この酷いという感覚は、「悲しみ」の感情につながりもするだろう。ではたとえば、つぎの文章はだれが書いたとおもうか。

この島に一縷の望みを抱いて病と闘い、病に苦しみ、父母、兄弟姉妹と無惨にも生き別れ、友を捨て、故郷を捨てて、この島に淋しく死んでいった人達の死体を解剖する度に、私はどんなにか気の毒に思いその人達の冥福を心から祈り続けました。それが私にとって医学への強いはげみともなり、大いに得るところがありました。

一読して、解剖したものによる手記だとわかる（飯島筆廼「或る医員の回顧」『国立療養所大島青松園五十年誌』国立療養所大島青松園、1960年。同書所収の「職員録」によると飯島の在職期間は1909年4月11日～1910年10月31日）。ここに記された冥福を祈るころや「気の毒」との思いは、「悲しみ」の感情につうずるだろう。ひとまず1例ではあれ、解剖するものもいたみや悲しみを感じ、それを忘れていなかったといえる。では、つぎの事例はどうか。

内臓癩は故小林所長〔和三郎。所長在職期間は1911年2月24日～1919年3月17日〕の著書として独文で出版されたものであるが、其の解剖例数が六十例であつたのと、多少不完全な点もあつたので、当時の医局員は三百余例の解剖例を更に精細に追求して、これを補遺せんと試みたが、戦争に禍されて貴重な標本や記録を失い、其の内に死亡や転任が相次いで起り、遂に三百余例の内臓癩を総括的にまとめることが出来なかつたことは、かえすがえすも残念なことであつた。

これは、前掲『国立療養所大島青松園五十年誌』所収の「研究業績」にみえる一節である。小林が所長として在任した1911年から1919年までの9年間に、大島療養所では261名が

亡くなった。解剖例数 60 が大島の療養所での数値なのか、また 300 例がいつからいつまでにどこでおこなわれた解剖の数なのかは、わからない。ともかくここには、解剖をめぐる淡々とした記述がある。執筆者にとって、さらには、この書き手があらず解剖執刀者たちにとって、解剖は研究業績をあげるための資料にすぎない。少なくともこの記述には、療養者の死へのいたみや悲しみはない。惜しまれているのは、戦災で資料を失ったことだけである。

もう 1 つ、解剖の現場にいたものによる、そのようすを記録した文章をみよう。書き手は、療養所開設の翌 1910 年 1 月 15 日から 1918 年 2 月 12 日まで、大島療養所に「小使」として勤務したものである（福井長平「思い出」前掲『国立療養所大島青松園五十年誌』所収）。

解剖のことについてお話し致しますと、当時は下駄ばきで手はそのまま、その消毒は石炭酸と昇汞水で、そのあとで入浴していました。その風呂は五右衛門風呂で、焚く薪は私が作つて沸かしたものです。小林所長の時に解剖承諾書が出来まして、私が必要なことを患者さんから頼まれて記入したものでした。又木綿の手袋をはめ、マスクをして解剖するようにもなりました。

ここにある解剖承諾書に記入がもとめられていた時期ははっきりとしない。入園時に解剖の承諾をもとめられなかった時期もあったという。

さて、「悲しみ」とはだれの感情かと問うとき、解剖した当の医員の感情はひととして望ましく、研究業績記述者には非人道さがあらわれている、とみればよいのだろうか。前者の飯島も、その手記の末尾を、解剖とそれをする事のいたみが励みとなり、さらには得るものもあったと結んでいるのだから、業績をあげられたといっていることとなる。業績あるいは成果と解剖とをつなげて了解するところは、両者同じだ。

*sorrow*⁹ わたしたちは大島で、解剖台の引き揚げ後に、いくにんもの在園者がいくつもの言葉を発し、会話を交わしたと聞いた¹²⁾。それを話し手は「うわさ」と呼んだ。複数の

¹²⁾ ここにいう、わたしたち、とはわたしと審査中別稿の共同執筆者である石居人也。

職員が「ショック」という言葉を発したといい、療養所に長く暮らすひとたちは、過去の、死や葬送にかかわる出来事を思い起こしたという。かつて療養所には、「セキモト制度」という仕組みがあり、また、療養者の死にさいしては、「オンボウさん」の役も療養者が担った時期があったという。前者は、重篤になったものの世話をしたり、亡くなったのちには死者を解剖台まで運んだりするためのひとを配する制度で、後者は、死者を棺におさめ火葬するものだとのこと¹³⁾。わたしたちにこうした「うわさ」を教えた在園者は70歳代後半で、1950年より少しまえに大島に来た。彼はこの「セキモト制度」を知らないという(だから漢字表記もわからない)。この制度と「オンボウさん」とのちがいは、かならずしも、はっきりしてはいない。もはや若いとはいえない世代の、しかし療養所に来た時期は新しいひとにとっては覚えのない、療養所での死と葬送をめぐるかつての仕組みを、解剖台がいくにんかのひとに想起させ、それが語られたのだった。

もとより、わたしたちは数多くのひとたちから解剖台引き揚げについて聞き取りをしたのではなく、わずか2名の方からその元に届いた「うわさ」を又聞きしたにすぎない。聞き取りのフィールドワークというにはおこがましいサンプル数だ。ここでは、解剖台の登場によって想起された過去を実態として論じたり、その信憑性を判じたりするのではなく、思い起こされた場面がどういった場だったのかをみようとおもう。それは、療養者の死に臨む場であり、そこに人びとが集まり、死者を送る場である。「病友」¹⁴⁾としてその死を深くいたんだこともあったろう、知友とはいえその遺体を「座棺」¹⁵⁾に納めることはなにかいやな役回りだったかもしれないし、最期の務めとしてすすんで引き受けられたのかもしれない、解剖台のうえでの別れをあまりに粗末だと憤激しただろうか、あるいは、どっしりとした(しかも磨かれていたという)コンクリートの台のうえを冷たかろうとみたか

¹³⁾大島青松園入所者自治会編『閉ざされた島の昭和史 - 国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』(大島青松園入園者自治会(協和会)1981年)の「習俗と園内特殊語」の節に「籍元・祭祀世話人」の項があった。その記述などを資料として本稿末尾に掲げる。

¹⁴⁾聞き取りにさいして話者がそういったのではないが、在園者たちはしばしばこの表現を用いる。

¹⁵⁾わたしたちが聞いたかぎりでは「座棺」ということだった。これが用いられた時期はわからない。

わたしたちは、解剖台をまえにして故人を送ったときの感慨や追想をきちんと確かめるにいたらず、それを推察するよりほか手立てがないのだ。

ひとまずそれは、「セキモト制度」や「オンボウさん」という言葉に集約されているのかもしれない。それは、悲しみや痛みや放心、もしかすると安堵の感情だったかもしれないし、そう形容することも厭われて、ただ制度や役の名をもってあらわしたのかもしれない。海岸に捨てられていたコンクリート塊が展示作品解剖台となる過程で、療養所に長く暮らしたものは、そこに自分たちの、また、療養所の過去をみて、ひとりの死の現場をここに思い浮かべ、それを声に出したのだった。それは、ひとりの死を、複数のひとたちで送る場にほかならない。それがどういった感情やどのような感慨だったのかを押し量るのはやめて、ひとまず、いろいろだったろう、と想像するだけにしておこう。「セキモト制度」と「オンボウさん」の想起は、療養所での死がひとりだけの葬送ではなかったことの確認だったともいえよう。

sorrow 10 くりかえせば、GALLERY15の展示「鏡mirror展」は、療養所で使用された日用品の一部を磨きあげ、そこを鏡としてみられるようにしたアートの配置だった。解剖台は日用品ではないが、それはかつてのぴかぴかだった姿をとりもどすことはなかった。そのかわり、海水に漬かっていて付着した貝をはがすために、バーナーの炎で焼かれてできた黒い焦げ跡と、重機による引き揚げにさいしてまっぴたつに割れた大きな断面とが残された。この2つの解剖台引き揚げの痕跡は、そこになにかを直に映すことはないが、葬送の場の証を粗末に扱ったその印として残りつづけ、それをみるもののなかに怒りをあらたに喚起するかもしれない。

そう、わたしは、遺物としてあった海岸から引き揚げられて展示された解剖台という作品が、あらためて、隔離されて虐げられてきた療養者たちの歴史への怒りを引き出す梃子となった、これはいわば療養者の怒りの結晶であり、しかも捨てられ放置されてきたことがまた、隔離の歴史を抹消する過ちだったのだ、と報じられたのであれば、かんたんに納得したのかもしれない。だが、解剖台をめぐる、それをまえにしたときの感情を怒りと

あらわした報道やコメントは皆無だったとおもう。解剖台を語る感情は怒りがふさわしいと感じる反面、ひとの感情を選別したり誘導や操作したりすることは、まちがっているだろうとおもう。展示作品解剖台をまえにして怒りの感情をこみあげたものは、療養所の歴史を悪とだけみているからなのかもしれない。展示作品解剖台は、わたし自身の癩そしてハンセン病の歴史の見方をとらえかえす鏡となっている。NHK「日曜美術館」では、GARRELY15の「鏡 mirror 展」のなかに置き場所を与えることで、大島の解剖台をうまくアートとして、展示作品として、の見方を示していたとおもう。(いくつか余計とおもう演出もあったり、「現代アートに強い関心を寄せる」ものや政治学者が大島へ上陸しなかったりしたこともふくめて)

さて、NHKが放送したもう1つの番組にふれよう。2010年9月の大島での調査中にたまたまみた「しこく8」(9月17日金曜日夜8時放送)が、「ひびきあう島と芸術」のタイトルで芸術祭をとりあげた。番組の冒頭では、ナレーションで芸術祭の会場は7つの島と高松と周辺などと紹介されるなか、それらを1つにまとめた地図が画面に映しだされた。島々をまわるレポーターは、リリー・フランキー。直島、豊島、小豆島を彼がまわり、BGMと字幕スーパーと映像のみで小豆島、女木島、豊島の作品が紹介されたが、大島はナレーション、字幕スーパー、映像のどれでもふれられはしなかった。レポーターがいくつかの島で地元のひとに、リリーです、と名乗る映像が強くわたしの印象に残っている¹⁶⁾。

sorrow 11 解剖はいくつもの療養所でおこなわれていた。それが執行された台は、現在ある国立療養所13施設では、大島にだけ残っているという。もっともそれは、ついこのあいだまで、海に捨てられていたのだが。投棄され海水に漬かっていたコンクリート塊を引き揚げ、芸術祭の作品として展示するきっかけは、ひとりの在園者がつくった。彼は芸術祭でこれまでになく多くのひとが島外から訪れるようになるだろうから、それを機に療養所の歴史を知ってほしかったと述べた。彼はまた、自分が属する療養所内の団体が所蔵す

¹⁶⁾ この番組はのちにNHK総合(大津)でも10月22日に放送され、NHK BShiでの10月29日放送予定も確認した(10月23日)。

る歴史資料を、広く公開することにも努めた。

20年以上にわたって発行されつづけてきた逐次刊行物は、療養所で人びとが生き抜いた証というにふさわしい歴史資料といえるかもしれない。療養者は、機関紙に執筆し、それを編集し、発行しながら療養所で生きていったのだから。ただ、『広辞苑』(第6版)で「生き抜く」とは、「苦しみに耐えて、どこまでも生き通す」と説かれていることに照らすと、平穏を生きる時、苦しみに耐えられないとき、生きとおせなかったときには、やはり、この語でその生をあらわせなくなってしまう。「生き抜く」とは、療養所のなかでのごくかぎられた生しかあらわせない言葉なのだ。わたしは、かんたんには、療養所での生活が楽だったとはいわない。それでも、多寡を計ることをしないものの(苦しみと楽しさとどちらが多いか少ないか)また、もとよりなにかをあらわすとは対象を限定することがつきまとうものとはいえ、いろいろとこぼれ落してしまう見方をうけいれることはできない。「生き抜く」を『新和英大辞典』(研究社、第5版)で引くと、「survive」と出た。療養所での生を生き抜いたというとき、それはすべての療養者を指しているのか。療養所を苛酷な環境の抑圧された場所とみれば、そこで生きたものはみなサヴァイヴァといい得るのか。

わたしは、癩そしてハンセン病の療養所を、抑圧の場としてだけ、また、徹底して隔絶された場としてみることはできない。療養所に生きた人びとの生を、困苦としてのみあらわすことができない。療養所のとくに厳しい環境を生きたものやそのなかでなにかを成し遂げたものをサヴァイヴァというとき、それを生きられなかったものやなにか成果を遺せなかったものにはそう呼ばれる資格がないこととなる。療養所そのものが生きにくい残忍な場で、そこに生きたものすべてをサヴァイヴァと呼ぶのであれば、療養所には苦痛しかなかったこととなってしまう。どちらの見方も、療養所の歴史とそこに生きた療養者の生を見誤ってしまうとおもう。

紙に文字が記された史料であれ、コンクリート塊の解剖台であれ、どちらもそれをみる「わたし(たち)」を映し出す鏡だとするとき、それを証、しかも生き抜いた証という確固とした実態としてみるのであれば、それはみるものによって映し出される映像がことなる鏡ではなくなってしまう。鏡にもっとも多く映し出される像は、ひとの顔だろうか。それ

は「わたし(たち)」の顔であっても、角度により、日により、また気分や感情によってもその像はかわってくる。

かつて使われた解剖台も、過去につくられた文献も、そのときになにがあったのかを伝えるだけでなく、わたしたちが過去をふりかえったり歴史を考えたりするときの、その手立てや仕組みを問うているのだ。海から引き揚げられ、芸術祭の展示作品となった今回の解剖台は、療養者がそこに乗ることとなった時点である死をめぐる様相と、そこにいたる生の事態を大島の人びとに思い起こさせ、そのときに、当事者であれ非当事者であれ、「悲しみ」という感情や、「生きてきた」さらには「生き抜いた」という語によって、療養所の歴史と療養者の生を悲劇という物語に仕立ててしまうその仕掛けを考えよと指示している。だから、展示作品解剖台にはいま、黒焦げの痕跡と割れた断面がついている。

~ ~ ~

[附記]

本稿執筆中の2010年9月27日放送の「NNNドキュメント'10」(読売テレビ系)が、「その手をつないで ハンセン病の島から未来へ」のタイトルで大島青松園をとりあげた。その趣旨は、芸術祭を軸として、1つに来島者と在園者との、2つに在園者と旧友との交流を描き、これらのつながりを未来へとつないでゆこう、と展望するものだった。

この番組にはいくつもの疑問がある。まず、冒頭のナレーションがおかしい 「社会から締め出され、まるで囚人のように、この海を運ばれたひとたちがいます、ハンセン病の島大島、長く閉ざされていたその島に、この夏、初めて観光客がやってきました」 この放送の映像にあった夏祭り(これは芸術祭とは無関係)の開催は今年が初めてではない。過去におこなわれた夏祭りやコンサートにも、島外からの参加者や観覧者がいた。だから、「この夏、初めて観光客がやってき」たのではない。また、これとかがわって、「長く閉ざされていた」とはいつまでのことを指しているのだろう。これでは、「この夏、初めて観光客がやって」くるまで長いあいだ「閉ざされていた」、とうけとられないだろうか。さらに、「ハンセン病の島大島」とはどういうことか。ハンセン病をひきおこす癩菌がたくさんい

ということか、ハンセン病者がいるということか、島がハンセン病にかかっているということか。たとえば、国立療養所多磨全生園がある東村山市青葉町を、ハンセン病の町、というだろうか。事前に反響を考慮してけしてそうはいわないはずだ。「ハンセン病の島大島」とはあまりに杜撰な表現だ。報道であればせめて「ハンセン病の療養所がある島大島」とするべきだ(ただし、国立ハンセン病療養所大島青松園、という名称はないが)。イメージが悪いといたいのではない。どういう現実をあらわす表現なのか、なにを主張したいのか、これではよくわからないのだ。

そして、このドキュメンタリーの素材の1つとなっている芸術祭にふれながら、しかも、GALLERY15を撮影しながらも、そのすぐまえにある展示作品解剖台を、ナレーションでも字幕スーパーでも映像でもまったくとりあげなかったことが、とても不思議だった。また、複数回にわたって島を訪れて取材や撮影をしたのだから、あのコンクリートミキサー車やダンプカーの多さに気づかないはずはない。栈橋に轟くほどに重機が島に上陸してなにをしているのか気にならなかったのだろうか。わたしがディレクターであれば、番組を構成するいわば章をつなぐイントロに大土木工事の映像とコメントをはさむ。

もちろん、ドキュメンタリーもテーマや取材方針を1つに絞ったうえでおこなわれるだろうから、あれもこれもとりあげることができないということなのだろう。島の外にはまづ知られていない、今年9月の時点で2月から毎月いっているわたしも知らなかった、在園者の自殺もとりあげ、療養所におけるつながりをテーマにしたこのドキュメンタリーの意義は確かにある。芸術祭にかかわって解剖台についてもすでに新聞報道やテレビ・ニュースで伝えられているから、このドキュメンタリーでは省略するという判断があってもよいかもしれない。だが、大島の現状ということで、ほんの数秒であっても、島外ではまづ知られていないヘリポートや居住棟を建造する大工事についてふれてもよかっただろう。

なお、芸術祭開幕後、(いつまでのあいだにかは不明だが)、大島にはおよそ2000人が訪れたという。

本稿執筆中の2010年10月11日にはさらに、「望郷の島から ハンセン病と家族の絆」(関西テレビ系)が放送された。2010年度文化庁芸術祭参加というこの番組は、岡山県にある

長島の邑久光明園をおもな取材場所としていた。

~ ~ ~

[掲載写真]

写真 (1頁左) 住む在園者がいなくなった寮を改造した GALLERY15。15は元の寮の番号。このまえ(画面の右)に解剖台が展示されている。展示作品解剖台にはいっさい説明がない。

写真 (1頁右) GALLERY15の入口。ここでの展示は5期に分かれ、第1期「大智×東條展」(7月19日~8月10日)、第2期「鏡 mirror 展」(8月12日~31日)、第3期「古いもの 捨てられないもの 展」(9月2日~21日)、第4期「松展」(9月23日~10月12日)、第5期「大島の生活展」のちに「大島に暮らす展 / 大島の身体(からだ)展」と改題(10月14日~31日)。

写真 (2頁上左) カフェ・シヨル外観。大島のかたちをした看板がかかっている(吹き出しのようになっているところは棧橋か)。シヨルとは、あくびしよる、とか、居眠りしよる、などというときの讃岐弁だという。

写真 (2頁上右) カフェ・シヨルのなか。メニューのボード。

写真 (2頁中左) カフェ・シヨルのランチ、オープンサンド。プレートには、きゅうりのピクルス、ラタトゥイユ、目玉焼きののるトーストと、かぼちゃとレーズンのクリームチーズサラダがのったトースト。もう1つのランチは、キッシュ(このときは、じゃがいもとソーセージのキッシュ)。ほかに、パウンドケーキやスコーン、おまけお菓子がある。野菜や果物は大島産。食器は、在園者から大島焼の作り方を習って、大島の土を使い、大島の窯で焼かれた陶器。本頁左**写真** _02 は文旦ジャムのパウンドケーキ。



写真 (2頁下右) カフェ・シヨルの六方焼き。かつて「社会」で菓子職人だったひとが大島の療養所に入り、大島でも菓子をつくっていたそのうちの1つ。往時のままの味では

ないが、スタッフがきちんと訓練をつんでこれをつくりあげたという。表面に「おかしのはなし」の文字がある。

写真 (2頁下左) Morigami。訪れたものが、置いてある折り紙で森をつくるという企画。ここは「文化会館」という施設で、壁には大きな書棚がならんでいる。わたしにとっては、大島での最初の調査場所。いくつかの新聞もおいてあり、在園者や職員がみにくる。眼鏡の販売なども、ときおりおこなわれる。

写真 (3頁) 高松港から「Liminal Air:core」越しに大島を眺める(2010年8月19日撮影)。この写真撮影のあとに刊行された『芸術新潮』(新潮社、2010年9月号、2010年9月25日発行、同年8月25日発売)の表紙もこのアングルだった。

写真 (5頁) 「国立療養所大島青松園」の門柱。

~ ~ ~

[資料]

前掲『閉ざされた島の昭和史』の209-210頁に、つぎのとおり記されている。

籍元・祭祀世話人 / 当時の自治会会則第三章に、次のように記載されている。 / 第五条 重不自由者、不自由者、少年少女のために籍元を設ける。 / 第六条 籍元には普通寮(軽症寮)が当たる。 / 第七条 籍元は在籍者の付添い、入室、転室、退室(病棟より)、転寮を助力し、葬儀に関しては所属寮長と協議し、これを司祭する。 / 不自由者の大事の場合の共済制度であり、“親元”みたいなものである。要保護者名を軽症寮へ指定配分しておき、必要に応じて軽症者が助力を分担した。その中の大役は「重症時の病棟における付添い」と、「死亡後の一切の処理」であった。この籍元制度も、病棟、不自由寮の職員看護切替えがすすみ、あわせて不自由者が増加、一方、軽症寮員の健康低下等の理由もあって廃止した。昭和40年である。しかし「死亡後の処理」のために「祭祀世話人」という専任の係を設け、今日まで続いている。人員は五名。 / 業務内容は、死亡者の遺族、友人知己への連絡、枕頭のあとじまい、夜伽室^(マ マ)の準備、通夜、葬儀法要の準備、

あとじまい等である。最近は、この祭祀世話人の選任もむつかしくなっている。

なお、同書所収の「協和会会則」に、籍元の条項はない。

また、療養所の史書である前掲『国立療養所大島青松園五十年誌』の「俗説による園内特殊語」(執筆者は在園者の齊木創)にも「籍元」(286頁)があり、つぎのとおり記されている。

人事部所管細則 第三章に、次のように記載されている。/第五条 重不自由者、不自由者、少年少女ノタメニ籍元ヲ設ケル。/第六条 籍元ニハ普通寮(註=軽症寮のこと)ガ当ル。/第七条 籍元ハ、在籍者の付添、入室、転室、退室(註=室とは重病室で世間の入院に当る) 転寮ヲ助力シ、葬儀ニ関シテハ所属寮ト協議シ、コレヲ司祭スル。/又、会員申合せには『籍元配属者、又ハ寮員ノ重症付添ハ当該寮デ行ウ』などとあつて、これは大事の場合の共済制度だが、要保護者数名を「重症時の付添」と、「死亡後の処理一切」で、肉親や寮員を代行する“親元”みたいなものだ。

おそらく、さきの『閉ざされた昭和史』の記述は、先行するこれらの療養所の史書を参照したのだろう。

現在、大島の療養所の自治会会則などは、そのすべてが残されているわけではない(阿部安成「療養所における「自治」論の始線と史料の現在 - 大島青松園をフィールドとして」『隔離の百年から共生の明日へ ハンセン病市民学会年報 2009』2010年、参照)。いまに残る自治会会則などのなかで、1941年大島青松園協和会細則(キリスト教霊交会所蔵)にだけ、「籍元細則」が掲載されている。その全文を以下に記す。

「籍元細則/第一条 互助相愛ノ精神ニ則リ、特定室配属者ノタメニ籍元ヲ設ク/第二条 特定室、少年室、少女室配属者ハ籍元家族ニ准スルモノトス/第三条 籍元ト特定室配属者ハ相互ニ在来シ、其親睦ヲアツクスルモノトス/第四条 籍元ハ在籍者ノ入院、結婚、葬式並転室等ニ関シ助力保護ヲ加フルモノトス/第五条 特定室配属者ノ遺品、遺金等ニ関シテハ、籍元室長ハ配属特定室室長ト協議ノ上、総代ノ指示ヲ得テ之ヲ処分スルモノトス/第六条 特定室配属者ハ入園、退園、転室、一時帰郷、入院、退院等ニ関シ、籍元ニ報告スルモノトス/第七条 籍元ハ配属室ト共ニ之ヲ決定シ、人事部主任ヨリ籍元室長及

配属室長ニ通知スルモノトス」(1941 年大島青松園協和会細則、47 頁)

同書中の「室員配属細則」の第 2 条で、「家族室ヲ左ノ五種ニ分ツ」として「普通室 / 特定室 / 重特定室 / 少年室 / 少女室」があげられ、第 3 条で「特定室ハ作業不可能ニシテ看護ヲ要スル者ノタメニ設ク」「重特定室ハ特定室員中、特ニ不自由ナル者ノタメニ設ク」と定められている。籍元とは、ただ葬送にかんしての助力の制度なのではなく、療養所で暮らすうえでの「作業不可能」や「不自由」をめぐる互助の仕組みだった(話者も葬送だけの制度とはっていない)。ただし、いまのところいつ定められたのか、それが機能した時期はいつなのか、どのように活用されたのか、はわからない。

2010 年 9 月の大島での調査で、かつて大島にいた療養者の遺言書の写しを得た。その宛て先の 1 つが「籍元」となっていた(阿部安成「自分の肉体は余り善きものでなかつた - 長田穂波遺言」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.139、2010 年 9 月、を参照)。



